

「子供を祝福する」

2015年11月05日

ルカによる福音書 18 章 15 節～17 節。イエスに触れていただくために、人々は乳飲み子までも連れて来た。弟子たちは、これを見て叱った。しかし、イエスは乳飲み子たちを呼び寄せて言われた。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。はっきり言うておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」

当時、ラビ（ユダヤ教の教師）が通りかかると、幼子を連れた母親が我が子の頭の上に手を置いて祝福してもらおう風景がいつも見られた。母親たちが主イエスを見て、子どもたちへの祝福を求めた。そこには、乳飲み子を抱いた母親もいた。これを見た弟子たちは叱った。なぜ、叱ったのか。子どもは 12 歳になれば、「律法の子」と言われ、一人前の人間と認められるが、幼子はそうではなかった。弟子たちは大事な宗教の話をしている時、子どもが割り込んできたことに怒ったのであろう。

主イエスは、ルカ福音書 19 章 41 節に「都のために泣いて」と、ヨハネ福音書 11 章 35 節に「涙を流された」と、二度涙を流して泣いたと書かれている。「笑った」という記述は一度もない。確かに、福音書には、生真面目で挑発的な姿が多いように見える。しかし、難病や悪霊につかれて苦しむ人々が癒された時、周りは大きな喜びに包まれただろう。徴税人や罪人と会食をしばしばしているが、そこでは笑いが絶えなかったであろう。更に、主イエスの譬えには権力者に対する辛辣な皮肉があったが、苦難にある人々を喜ばせ、思わず笑いがこみあげてくるユーモアがあった。笑ったという表現はないが、主イエスの周りは喜びと笑いに満ちていたと思える。そうでなければ、人々が群がることはない。

我が子に祝福を求める母親たちは主イエスが気難しいラビではなく、柔和で、全てを受け入れる優しいラビだと思えたに違いない。子どもたちにしても、しかめっ面をした人には近づきたくないであろう、事実、主イエスは乳飲み子たちを呼び寄せ「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない」と弟子たちをたしなめている。律法に関しては一人前ではないが、神の祝福を受けるにふさわしい者として招いておられる。

そして、「神の国はこのような者たちのものである。はっきり言うておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない」と言われた。神の国は、乳飲み子、幼子たちのものである。「はっきり言うておく」は、ギリシア語の「アーメン レゴ（私は真に言う）」で、特に聞くべきことを言う場合に使われる言葉である。乳飲み子、幼子たちは神の国を受け入れている。彼らのように受け入れる者でなければ、神の国に入ることはできない。

私は教会付属幼稚園の園長を、4 年ほどしたことがある。子どもたちに神様を教えたら、100%信じる。否定する子は一人もない。なぜ、彼らは神を受け入れるのか。それは、自分が弱い存在であることを知っているからである。親や家族に守られていると安心する。それ以上に大きな全能の神様が守ってくださると聞いて、無条件に喜んで信じるのである。年齢が進み、知恵がついてくると「神様なんかいない」と言い始める。当然の成長である。しかし、その後、大人の信仰が芽生えてくる。私たちは子どもに帰ることはできない。自分の弱さを認識する時、幼子のように神を信じて頼り、苦難の中にある他者が見えるようになる。それが「神の国」である。